

# 聖夢と宗教

— 宗教的聖者のみた夢 —

岡 邦 俊

## 序 説

おもしろい夢、おかしい夢、悲しい夢、はかない夢、楽しい夢、神秘的な夢、恐ろしい夢、夢はまことに不思議な現象である。それは古代未開人にとつても、現代文化人にとつても、色々な意味で重要な心理現象である。夢をみることは人間に限られているようであるが、どうして人間は夢をみるのであろうか。

夢の原因とはどのようなものであろうか。夢の性質なりその構造には如何なるものがあるであろうか、等の問題は心理学の課題として重要にして興味あるものである。既に今日まで多くの研究がなされて居り、心理学、特に異常心理学や社会心理学を初めとして、臨床心理学や精神医学の分野からも貴重な成果があげられている。

併し私がこゝで取扱つた問題は、このような広範な夢そのものの研究を意図したのではなく、ほんの夢の研究の一小部分なのであつて、特に宗教的聖者の伝説にまつはる「靈夢」「夢告」「靈告」などと云はれているものに関する試論なのである。宗教的聖者の場合のみならず、一般の人々も夢をみて、それを色々に解釈し、判断す

る。「悪い夢」「善い夢」「正夢」「逆夢」等と云つて、人間は夢によつて何か自分の運命とか、幸、不幸を予測し、判断し、解釈しようとする。夢の中で貴重な発明や創作のなされたこともあり、夢によつて病気の早期診断が出来ることについても明らかにされている。<sup>(2)</sup>

理想を持つことを吾々は時としては「夢を持つ」とも云い、夢のない人生は淋しいものとなり、現実の殺風景、無味乾燥の中で、吾々は夢を持つことによつて慰められ、励まされ、生き甲斐を感じることさへある。小説が多くの人々に読まれるのも、結局は小説によつて読者は夢をみ、夢を楽しみむからであろう。小説の趣味は現実にはあり得ない「フィクション」であつて、謂はゞ「そらごと」である。読者はこのそらごとによつて自己を慰め、励まし、時としては、現実的に悲しみ、喜び、泣き、笑ふのである。「夢がみたい」と云ふ人間の慾望を小説はみたしてくれるのである。現実にはあり得ないが、而も、あつてもらいたい、と云ふものが夢によつて満足させられるのである。美しい夢、大きな夢を持つことは人間にとつて仕合せなことであらう。この意味では、むしろ現代人には夢がないために、多くの人々は「行き当りばつたり」「その日その日」の現日に追いまくられて、あはただしい、ゆとりのない生活を送つていようである。人間は夢なくして生きられない動物である。

未開人の宗教にあつては夢の役割はまことに大きい。未開人に共通の宗教現象としての「アニミズム」、即ち、万物万象の中には肉体とは異つた靈が宿つているとの信仰、の起源はまことに人間自身の「死」と「夢」の現象であつた。彼等は精靈とか靈魂と云ふものをこの死と夢から連想し想像したのであつた。

死は人間の行動、一切の活動の停止であるが、かゝる現象は肉体から「靈」がとび出たことを意味する。夢で

は肉体は床によこたはつてゐるが、靈は自由に活動するのである。

仏教の教祖釈尊は、母マヤ夫人が白象の胎内に入るを夢みて後に生れたと云はれている。マヤ夫人のこの夢なくば釈尊の降誕はなく、従つて、仏教もあり得なかつたと云ふことにもならう。まことに仏教はマヤ夫人の夢から誕生したとも云へるであらう。

キリスト教の教祖イエス・キリストは母マリアが、聖靈に感じて受胎し、誕生したものであることを夫であるヨセフが夢告によつて知らされた。だとすれば、聖靈に感じたこと云ふ恐らく夢中の現象と、そのことを夢によつて告げられたと云ふ二つの夢がキリスト教を發生せしめたことにもなる。この二つの夢なくば、キリスト教は誕生しなかつたであらう、とも云へるであらう。キリスト教文学中の名著であるバンヤンの「ヒリケリムス、プロケレス天路歷程」は著者自身の一大長篇夢物語りとなつてゐる。

天国、浄土、神、仏と云ふも或はそれは、美しくも聖なる夢であるかも知れぬ。夢にしては余りにも神聖にして善美をつくせる夢である。キリスト教の聖書はイエス・キリストの夢物語りであつたかも知れぬ。仏教の經典は釈尊や熱烈なる仏教徒の夢かも知れない。

併し、それは普通のありふれた「ただの夢」ではない。人間の全身全靈を慰め、励まし、活気づけ、人間の本質構造をすら改造し得るが如き偉大なる、そして、聖なる夢である。夢はまことに不思議なものである。学問的にも解明しつくされたとは云へない夢について、特に、宗教的聖者のみた夢の若干の記録を紹介して、これについていささか心理学的解釈を加へてみたい、と云ふのがこの小論の意図なのである。

## 一、夢の心理学

夢そのものの研究が今ここの私の課題ではないが、後の私の論述に参考となる二、三の点について、夢の一般性格なり構造を検討しておきたい。夢の一般性格について宮城教授は次のように述べている。

「我々は生涯の四分の一以上を眠つて過す。このことだけからも、心理学で、睡眠中の精神状態が無視できないこと、夢が大切な問題であることが了解されるであらう。しかし、それだけではない。心理学にとつて、夢の研究には、はなはだ重要な意味がある。目を醒しているとき、我々はつねに周囲に対して関心をもっている。(中略)ところが、睡眠中には少しぐらいの響には気がつかないし、周囲に何がおころうが注意しない。我々は周囲に対してある程度、無関心になる。ベルグソンがいつたように、『眠ることは無関心になること』なのである。(中略)睡眠中、周囲に対して関心を失なつた人間は社会を離れて自分だけの世界に入り込む。ギリシアの哲人ヘラクレイトスは『醒めている者には一つの共通の世界があるが、眠っている人間では、各人が自分自身の私の世界に退いている』とのべた。眠っている人間は社会から離れて自分だけの世界に閉じこもる。(中略)人間は日常、心の中をすつかり、さらけ出してしまうことがない。わざとかくすつもりがなくても、無意識にかくす傾きがある。友人が結婚したという通知をうけとつた未婚の女性は、喜んでお祝いの手紙を書くが、必ずしも心の中に喜びの感情だけを抱いているのではない。嫉妬もあらう。はやく結婚したいというあせりもあらう。ただ、自分でさえも、こんな心のなかのさまざまの傾向を意識していないことが少なくない。

ところが、夢には心の奥底にある気持があらわれる。その友達が離婚した夢や、自分の結婚式の夢を見る。夢によつて人間のうわべの性格だけでなく、ごく深い個性が明らかにされるのであつて、夢の解釈が『無意識』の知識に導く王道であることはフロイトの通りである。<sup>(3)</sup>

こうなると人間の夢は現実の自分自身よりも、むしろほんものの自分自身の姿であるとも云へるかも知れぬ。

このような夢の原因については色々と説明されているが、(一)「目をさませない程度の刺戟」(二)過去の経験としての記憶、(三)人間の傾向にもとづく願望と恐怖、は夢の主要原因と云へよう。特に、人間の願望は夢の原因としては重要なもので、フロイトは「夢は願望の実現だ」とさへ主張した。「神話も夢と同じ方法で解釈される」<sup>(6)</sup>と云はれている。このような原因によつて生ずる夢の性質はどのようなものであらうか。(一)「夢の知覚は、睡眠中の知覚のように適応を可能にしない。普通の知覚は、大体において、刺戟に応じているが、夢では、ある音をかすとき、必ずその音に関係した夢が現われるものではない。」(二)人間の思考と云ふものは感情的な、主観的なものを捨てることであるが、「睡眠中にはこのような思考の性質が失われ、主観的、感情的な思考が生まれるのである。」(三)「夢では知性が低下するとともに、意志も減弱し、日常生活で精神的に加えられている制限―道徳、慣習―は、弱められるか、除かれる。」このように、夢では思考の論理も乱れ、「因果のカテゴリも失われ」、従つて又「判断ができなくなり、批判力もなくなる。夢の中では、どんなものも、そのまま信ぜられて、経験に矛盾したことでも、おかしいと思われない。」<sup>(13)</sup>夢の中の思考がばらばらで統一のないものもこの理由によるものである。夢は謂はば無意識であり、意識活動の下部構造であり、意識の背後にあつて表面には出ないものである。夢

はあくまでも「非倫理的」であり、「非論理的」である。併し、この「無意識こそ、社会の束縛から離れた世界である。社会的知性が弱まることはマイナスだが、これで『無意識の智慧』の活動舞台というプラスの性質がつくられる。夢のなかで、外界の抵抗がなくなり、感覚の干渉が少なくなるとともに、このような活動舞台がつくられることは、創作をはなだしく容易にするのであらう。いわゆる創作や発明、発見でなくても、日常生活において、夢がかえつて真実を示す場合がある。」<sup>(15)</sup>この意味で又「夢の知覚がある方面では、その活動分野を拡張しているように（ベルグソン）、眠っている人間は、目のさめている人間より広い自我をもっているのだ（マーフィー）。夢のなかで我々は、何ものも恐れるものなく、何ものに気兼ねすることもない。仕事からも競争からも解放される。外界を注意する必要がなく、勝手なことを考え、自由にふるまうことができる。夢では必然の王国は自由の王国に道をゆずるといつた人があるが、夢みる人間はどわがま、自分で、自分だけしか顧慮しない者はない。」<sup>(16)</sup>夢はまた抽象的なものを具体化する性質を持つている。人間の意識的な思考は一般的には論理と理性とによる法則化、抽象化、普遍化の働きであるが、「夢は感覚的な性質をもっているから、抽象的な観念は、夢のなかには出て来ない。抽象的なものも、具体的なものになつてしまふ。抽象的な恐さ<sup>コウ</sup>を示すために、コドモのときにおどかされた光景が展開し、地位につきたいという願望を示すために、自分の地面はこれまでだといつて鼻で手をひろげる夢が出現するように、すべて具体的な形で、とくに見える光景として展開するのである。」<sup>(17)</sup>フロイトはまた夢を「抑圧された願望の変装した実現」である<sup>(18)</sup>と云つたが、すべての夢がそうとは限らない。或る一つの人間感情が他の感情によつて妨害されて、表面的意識活動とならない時には、その人は心の中で「感情のもつれ—コ

ンプレックス」<sup>(19)</sup>を持つことになる。このようなコンプレックスが抑圧感情であるが、これが夢の形で実現されることはしばしばあり得ることである。或る相手を「憎いから殺したい」と云う感情があつても、この感情の満足と云うものは、世間の道徳的感情や法律的禁止と云う他の力強い感情のために抑圧され、こゝにコンプレックスが生ずる。このコンプレックスが夢の世界にも大きな働きをすることは事実である。

古くから世界各地で夢の中で神のお告げがある、と云つた種類の信仰が行はれているが、「靈夢」「靈告」「神夢」がそれである。「バビロンの地下から発掘された楔形文字が主に、天文についてのものか、夢に関するものか」といふことは、古代からどんなに夢についての関心が強かつたかを示すものである。旧約聖書には、ヨセフが国王バロの夢を占つたことがでている。<sup>(20)</sup>プラトンは「夢を我々の心の内部にある非合理的動物の表われ」とし、<sup>(21)</sup>アリストテレスは「病気の徴候としての夢をのべて、身体の内部の感覚が睡眠中には、目を醒ましているときよりは、つきり感ぜられる」ことを主張した。<sup>(22)</sup>又、古いユダヤ教の法典にも夢の理論が詳しく述べられて居り、<sup>(23)</sup>印

度でも古くから夢が問題として取扱われている。<sup>(24)</sup>夢はあくまでも非現実的であり、非倫理的、非論理的であり、非社会的ではあるが、そのためにむしろ人間精神の奥底を示すものとも云えるであらう。<sup>(25)</sup>

私は以上に於て夢の心理学を素描した。而もその資料は主として宮城教授の「夢」を参照したものである。夢とはどのようなものであるかを理解するためには、当然他の多くの資料を検討する必要があるが、本論稿は序説に於ても一言したように、夢自体を問題として取り上げたものではなく、主として、宗教的聖者、而も今回はそ

の範囲も資料の関係で極めて限られたものであるが、の所謂「靈告」「靈夢」についての若干の記録を紹介したに過ぎない。

宗教的聖者のみた夢は常人のそれとは著しく変はつた形式のものではあるが、その聖者の夢も亦既に述べた夢一般の基本性格を持つものでなければならぬ。その意味に於て夢一般の性格は謂はば夢を理解するための尺度となるであらう。人間の複雑な精神生活は二つの意識活動、即ち、意識的意識と無意識的意識から構造されている。夢は無意識に属する重要な精神生活であり心理現象であることを附言しておきたい。

## 二、宗教的夢の実例

宗教的夢の実例として、こゝには教祖や宗祖と云はれる人々の誕生に因んだものを六つほど挙げてみたい。

### (1) キリストの誕生

「イエス・キリストの誕生は左のごとし。

その母マリヤ、ヨセフと許嫁いひなづけしたるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりてみごもり、そのみごもりたること顕れたり。

夫ヨセフは正しき人にしてこれを公然にするを好まず、私に離縁せんと思ふ。斯くて、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎はらに宿る者は聖靈によるなり。かれ、子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給



ふ故なり』すべて此の事の起りしは、予言者によりて主の云ひ給ひし言の成就せん為なり。曰く、『視よ、処女ももりて子を生まん。その名はインマヌエルと称へられん』これを訳けば、神われらと偕に在すといふ意なり。ヨセフ寝より起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。されど子の生まるるまでは、相知る事なかりき。斯てその子をイエスと名づけたり。』<sup>26</sup>

このイエス・キリストの誕生には二つの重要なことがらが示されてある。即ち、一にはマリヤの処女受胎と云ふまことに神秘的、超科学的事件であり、二には、この処女受胎の事実がヨセフの眠りの中の夢に於て告げられたことである。聖霊との交はりによりてマリヤがみごもつたと云ふことが、実際には夢中のことではなかつたかと察せられるが、<sup>27</sup>このことの解釈についてはこれ以上ここでは私は追求しない。更に又、このような神秘的処女受胎の事実が何故ヨセフの眠りの中の夢に於て告げられたか、についても種々解釈は出来るであらう。たゞここには亀井勝一郎氏の夢告についての一般的解釈を紹介しておきたい。<sup>28</sup>

「夢の中には神仏祖先の霊があらはれて、親しく何事かを告げるといふ古来の物語は、決して荒唐無稽な作為ではない。深い眠り―一切を忘却して無心になつた刹那―それは祈りの深さに似ているのであるが―この眠りの裡にはつきり覚醒しているものがあるに相違ないのだ。我々が平生醒めていると自覚しているとき、却つて様々の邪念に妨げられているようである。自分のはからひによつて是非分別し、これを覚醒と思ひこんでいる。しかし眞の覚醒は、自力一切から離れた刹那である。祈禱と睡眠―無心の状態において、永遠の法身がわが身を貫くであらう。さうしてみれば、覚醒とはおよそ反対にみえる眠りの裡にこそ、ほんとうに覚醒しているものがある

答だ。夢告とはかかる覚醒の間に聞いた言葉であるに相違ない。多くの伝説の中でもとくに荒唐無稽と思はれて  
いる夢の告を、私はその根本精神においては最も確実なものとして認めたいのだ。歴史の実体が神仏祖先の願を  
聞くことに在るとすれば、聞くことの核心は夢告のうちにあると云つていい答だ。」

(2) 釈尊の降誕

馬鳴は彼の著「仏所行讚」の開巻第一頁に釈尊の出生について、まことに美しい言葉を以て次のように述べて  
いる。

「甘蔗苗裔なる、釈迦無勝王は、

淨財の徳純ら備る。故に名けて淨飯と曰ふ群生の楽んで胆仰すること、猶し初生の月の如し

王は天帝釈の如く、夫人は舍脂の猶し

執志安らかなること地の如く、心淨らかなまこと蓮花の若し

仮に譬へてマヤと名く、其れ実に倫比無し

彼象天后に於て、神たましひを降して胎に処る

母悉く憂患を離れて、幻偽の心を生ぜず

彼誼俗を庄悪して、空閑林に楽処す

ルムビニーの勝園は、泉を流し花果茂り

寂靜にして禪思に順ふ、王に啓して彼に遊ばんと請ふ

王其志願を知りて、奇特の想を生じ

内外の眷属に勅して、俱に彼園林に詣らしむ

爾時にマヤ后、自ら座む時の至れることを知り

安勝の床に偃えん寝し、百千の姪女侍せり

時は四月八日、清和の氣調達せり

齊戒して淨徳を修するに、菩薩は右脇より生ぜり」<sup>(29)</sup>

この美しき詩の中で、特にマヤ夫人が受胎される時の句に、「彼象天后に於て、神を降して胎に処る」とあるが、これはマヤ夫人が胎内に白象が入つた夢ををみたものと伝へられ、その結果マヤ后はみごもつたと云はれている。

ここにも夢みることによつて受胎したと云ふ伝説が残つている訳けであるが、これは一体どのように解釈さるべきであらうか。この場合の象は何を象徴するものであらうか。それについての解釈は別として、釈尊の出生にまつはる夢について長井真琴博士の著「釈迦牟尼と其教義」の中から引文しておきたい。

「時しも迦維羅衛城にては六、七月頃に行はれるアーサールヒ月のお祭騒ぎがあつて城中の人民は遊び楽しんで、マヤ夫人は満月の前の第七日目から飯酒を避けて華蔓や薫香にて其身を嚴飾して此祭典を祝ひ、それより第七日の朝は早く起きて香水に沐浴し、四十万金を散らして大布施会を行ひ、身の綺羅を尽して最良の食を取り、八戒徳を行ぜんとて美しく飾れる吉祥ある寢室に入り吉祥の寢床に眠りつつかういふ夢を見た、四天大王が寢床にあるままで夫人を引き挙げてヒマラヤ山に運び去り六十由旬に亘れるマノーシラ（雄黄石）原野に於ける七由

旬に広がる大サーラ樹の下に置いて、彼等四大天王は一方の側に立つた、さうすると彼等の夫人達が来てアノータツタ池（無熱池）畔に伴ひ行きて此処にて人間の塵垢を洗除するために夫人を沐浴せしめ、天衣を着せしめ、香を塗らしめ、靈華を以て飾らしめて、此所より近き銀山の頂に黄金の宮殿がある、其所に東向きに靈床を敷いて夫人を横臥せしめた、其時仏は立派な白象となり、近き所に一の黄金山がある其所にて遊歩しつつ降り又銀山に登り、北方から来つて銀線の如き色の鼻に白蓮華を執り驚の如き声を発してかの黄金作りの宮殿に入り母の寢床に於て三度敬礼をして（右側を向けて廻るが其礼式）右脇を打つて胎内に入つたといふ夢であつた。<sup>(36)</sup>

この夢を国王は六十四人のバラモンの智者を招きて解釈させた。<sup>(37)</sup> その結果は「憂ふる勿れ、大王よ、夫人の胎内には子が宿つたのである。大王には男子が生れるであらう。其子は若し家に在住すれば転輪聖王となり、出家すれば仏陀となり、此世に於て総ての煩惱の汚衣を脱するあらう」と答へた。<sup>(38)</sup>

此の夢の内容を構成するものは凡て印度的風土に固有な幻想であり、特に白象の胎内に入るとあるは、前にも指摘せし如く、一体何を象徴するものであらうか。

(3) 仏教と同じく印度に発生したチャイナ教の教祖マハ・ヴィラ（大勇）の出生についても不思議な事件が色々相次ひで発生しているが、<sup>(39)</sup> その中でも特に、彼の出生に関連して、彼の母は十四の不思議な夢を見た。<sup>(40)</sup> その夢によつて、やがて驚くべき不思議の子がこの世に生れ出るものと解釈されたのであつた。<sup>(41)</sup>

(4) 法然上人の誕生

時国夫妻は偕老をちぎりてより久しき間子のなきを歎き、岩間の観世音に男の子一人授けたまへと祈願し、そ

の後まもなく母は夢みて懐妊したことが伝へられている。<sup>36)</sup>「勅修御伝」によれば、この間の事情を次のように述べて居る。

「抑上人は美作国久米の南条稻岡庄の人なり、父は久米の押領使漆時国、母は秦氏なり、子なきことをなげきて、夫婦こゝろをひとつにして仏神に祈申に秦氏夢に剃刀をのむと見てすなはち懐妊す、時国がいはいはく、汝がはらめるところ、さだめて男子にして、一朝の戒師たるべし、と。秦氏甚だ柔和にして身に苦痛なし、かたく酒肉五辛をたちて三宝に帰する心深かりけり」

こゝには父親時国自身が夢を解釈して、剃刀をのむと云ふことを「天下の戒師をはらむ」と判定したことは、まことに適切のようである。蓋し、剃刀は仏弟子となる者がその入門帰依の際に行はるる儀式に於て、その司式者が使用する要具であるから。

#### (5) 弘法 大師

伝記によれば弘法の誕生について彼の母がみた夢を次のように述べて居る。

「年始めて十二、爰に父母の曰く、わが子はこれ昔、仏弟子なるべし。何を以てか之を知る。夢に天竺より聖人の来りて、われらが懐に入るをみたり。かくの如くして妊娠して産める子なり。しかれば則ちこの子をもたらして、まさに仏弟子となさんとす」

この夢とは別に、同じ伝記によれば、弘法が幼年時代にみた夢について次のように述べて居る。

「われ昔、生を得て父母の家にありしとき、生年五六の間、夢に八葉の蓮華の中に居坐して、諸仏と共に語る

と見き。然りと雖も専ら父母に語らず。」

弘法が幼少時代より極はめて宗教的であり、彼の父母も亦この子供を将来仏弟子にふさわしき者に教育せんと  
の決意が、これらの二つの夢によつて理解されるであらう。

(6) 親鸞聖人の誕生

親鸞は幼少の名を松若丸と云ひ、弟の名は浅丸と呼ばれていた。この二人の兄弟は不幸にも、早く父母を失い  
悲しくも淋しい天涯孤独の人となつた。父有範を失つたのは松若丸の四才の時であり、母吉光女が亡くなつたの  
は八才の時であつた。

吉光女は臨終せまる苦しい息の中から、側に坐した二人のわが子と、亡き夫の兄範綱に過ぎし日に夢みた松若  
丸の誕生にちなむ不思議の靈告について物語つたのである。

「過る承安二年の夏五月二日の事おぞつた。其夜妾は無常を感じて、西枕にして独寝の夢を結びました。夜半  
の頃に至つて、輝きわたる光明、妾の身を三たび匝り、遂に口に入りまいておざります。妾愕いて光明の来た  
方を見ますれば、こは不思議、枕の西に容姿端嚴の人行立み、纓絡の飾りを揺めかして宣ふやう、我は如意輪觀  
音なり、汝に一人の男子を授くべしと靈告あり、五尺ばかりの五葉の松一枝授け給ふと見て、忽ち夢は覚めまい  
た。其頃より妾は有身の体となり、胎内に在ること十二箇月、承安三年四月朔日に至つて、安々産の紐を解いた  
のが、此の松若丸おざります。夫有範世に在る頃より、此の兒に家は継すまい、年頃に至らば、良き師を選ん  
で法師にせう。必ず名僧知識と仰がれる事もがなと、常々申して居られました。今よりは伯父公の御猶子、よく

よく計ひ給はりませ。」<sup>(39)</sup>

かく語つて吉光女は倒るるが如く枕に臥し、やがてまもなく永眠したのであつた。まことに不思議な夢である。松若丸は謂はば、夢告の中で授けられた観音からの「もらい子」なのであつた。又この夢告の中の「五葉の松の一枚」にも何かの深い意味があり、その象徴なのではなからうか。

### 三、夢による生活の大転換

私は手許にある限られたる資料から、教祖宗祖と云はるる人々の誕生に因んだ不思議な夢を紹介した。又、宗教的聖者の中には、彼等の生涯の中で大きな転換を夢によつてなしたとげた人々もあるが、こゝにはその実例として親鸞聖人の場合を紹介しておきたい。

聖人の生涯に於ける二つの大きな事件が、何れも夢告によつて発生し、而もこの夢告が聖人の全生涯を決定づけたのであつた。一つは十九才の時に於ける河内磯長の聖徳太子の廟に参籠した時に、そして一つは二十九才の時に京都六角堂に参籠した時に於ける夢告である。いづれも聖徳太子の化身とされている救世観音の夢告であつた。「彼の青年時代の心の動き、苦惱、さういつた事情は、すべて二つの夢告のうちに凝結していると思はれる。」<sup>(40)</sup>磯長でこうむつた第一の夢告について「高田正統伝」は次のように記して居る。

「十九歳初秋、慈円僧正に御いとまを乞ひ、和州法隆寺へ御参詣あり。覚運僧都の坊に、六十余日ましまし、因明の秘奥を研究したまへり。供奉の僧は、正全房侍従也。是人は養父範綱卿より御介錯に附られたる人也。同

年九月十二日、河州石川郡東条磯長聖徳太子の御廟へ参詣しましたし、十三日より十五日まで三日御参籠なり。第二の夜夢想を蒙りたまふ。十五日正午に件の記を書さる。其記文曰、

爰少仏子範宴、思入胎五松之夢、常仰垂迹利生。今幸詣御廟窟、三日参籠懇念失已矣。第二夜四更、如夢如幻、聖徳太子從廟内自發石扁、光明赫然而照於窟中。別三満月在現金赤之相。告勅言

我三尊化塵沙界 日域大乘相応地

諦聽諦聽我教令 汝命根応十余歳

命終速入清浄土 善信善信真菩薩

于時建久二年亥、暮秋中旬第五日。午時初刻、記前夜告令畢。仏子範宴。

此告令を得たまへども、深秘して口外なし。唯正全房ばかり、其記文を書きたまふを見る。然るに、汝命根十義にや。猶予ましますも理なり。其後二十九才に至て、浄土真門に入り給ふ上にて、当初の告命に十余才に至て清浄国土に入んとは、今此時を示されけるよと、日来の疑蒙を晴たまひけり。三十三才以後善信となのりたまふも、其本原この告命より興れり。」

聖人は九才の時に出家し、当時の仏教最高の学府であり聖地でもある、叡山で貧しい堂僧として忍苦精進していたのであつた。併しこの時の叡山は既に開祖伝教大師の崇高なる理想は既に失はれ、「学閥と政略とにみちた世間そのもの」であり、「僧徒の俗化あるひは暴力化」は、純真なる青年親鸞の失望、義憤、疑惑となり、何ら



かの生活の展開と転換とを求めて南都への旅に出られ、その間に磯長の参詣となつたものであらう。而もこの夢告は「汝命根<sup>ナンヂガイノチマサニヂウネンヨ</sup>応十余才」と、死の到来を宣告予言し、若き聖人の心魂に大きな不安をなげかけた。而も、「命絡速入清浄土」とは一体何を意味するか、このことも亦大きな不安と疑問となつたのである。「伝」にも記されてある如く、命根十余才とは聖人二十九才にして叡山を下り、吉水の法然上人の教化を受け他力攝取の念仏生活に入る迄の十年間であつた。又、速入清浄土とは、叡山自力修行の聖道門の仏教から、他力悲願の浄土門の仏教への転換を予告したもののようであつた。

何れにもせよ、かかる夢告を受けた聖人の意識、否、無意識の中には旧仏教への絶望と、新しき人生への再出発とを内容とする複雑微妙の心理が深く蔵されていたことが明かである。この無意識的心理が救世観音の化身とされていた聖徳太子の廟での祈願となつたのであらう。

聖人はこの夢告の内容を深く胸中に秘めつつも、なほ叡山でのきびしい修行と学問研究を続けた。而も夢告の謎は依然として解けず、新しい生活展開の希望も見出されず、悶々の日を過していたが、このような聖人の生活に最後の転換を決定させたものこそ、第二の六角堂に於ける夢告であつた。聖人二十九才の時である。

聖人が法然上人とめぐり遇ふた建仁三年の春に、叡山より京の六角堂に百日の祈願をかけた。「かくて参籠九十五日目の曉、宗祖は太子示現の文を感得し、それに示唆されて源空の門に入ることとなつた。」<sup>(43)</sup> 因に六角堂の本尊も亦救世観音であり、聖徳太子の化身とされていたのである。この夢告については、「本願寺聖人親繪<sup>ニ</sup>伝絵」によれば次の如く記されてある。

「建仁三年四月五日寅の時、上人夢想の告ましくき。かの記云く、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ、広大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく。行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂、といへり。救世菩薩善信にのたまはく、これはこれわが誓願なり、善信、この誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむべしと云々。その時、善信、夢中にありながら、御堂の正面にして東方をみれば、峨々たる岳山あり、その高山に、数千億の有情群集せりとみゆ。その時告命のごとく、此文のこゝろをかの山にあつまれる有情に對して、説きかしま<sup>オハル</sup>畢とおぼえて、夢さめ畢<sup>オハリ</sup>ぬ。」

「正統伝」の作者はこの告命を親鸞自身の訓なりとして、「行者しふほうにて、たとひ女犯すとも、われ玉女の身となりて、犯せられん。一生のあひだ、よく莊嚴して臨終引導して極樂に生せしめん」と和文に直し、且文章については、「行者宿報としてもし妻帯の宗風を弘めば、吾女身を現じ妻となりて是を始むべし。一生の間よく師の化導を資助し、臨終には極樂界に引導の大因縁となるべしとなり」と解釈している。<sup>44</sup>

何れにもせよ、この夢告を境として聖人はいよいよ二十年間の山上修行の生活を打ち切り、法然上人の吉水禪室に入り、「他力攝生の旨趣を受得し、飽くまで、凡夫直入の真心を決定しまし<sup>45</sup>けり」の大転換をなしたのである。この大転換がなかつたならば、今日の浄土真宗は説かれなかつたであらうし、又、聖人自身の生涯も亦恐らく全く変つたものとなつたであらう。

さて、六角堂の夢の内容なり解釈については詳論することは出来ないが、聖徳太子の化身とされていた救世観音が玉女、女身となつて犯<sup>オカ</sup>され、一生の間善信のよき伴侶として彼を助け、最後には彼を浄土に引導するとのこの

夢は実に聖人の無意識の中にあつた、或る大きな問題を、否、決断を前提していたようである。端的に云へば、浄土真宗特異の宗風たる「肉食妻帯」としての在家仏教の根本性格について、聖人はこの夢を見る前に既に胸中深く何か思念するところがあつたようである。即ち凡ての民衆が平等に救はれて仏になるためには、末代濁世にあつては自力修行により聖道門出家の道は到底不可能であり、あくまでも凡夫さながらの姿にて、在家止住の肉食妻帯のままで救はれ仏になる道が拓かれねばならない。聖人自身はこの時既に或る女性と結婚していたのであるまいか。<sup>(46)</sup> 当時としては僧侶、出家が公然と妻帯し肉食するなどは到底考へられないことである。併し、聖人の無意識深くには、肉食し妻帯して在家止住の平凡なる造悪無善の人々が救はれ、仏になる道こそ真の仏教でなければならぬと決意されたにちがいない。この聖人の思念、理想をみたまふものこそ法然上人による念仏の信仰であつた。「現世の底に身を沈めて、改めて如来の悲心を仰がんとの転換であつた。」<sup>(47)</sup> まことに大いなる転換であり、否、生活態度の根本革命であつた。聖人の見た夢の背後には常にそのような夢を見させた、無意識的心理が力強く働いていたことは否定出来ないであらう。

最後に宗教的夢の性格について一言しておきたい。宗教的夢は他の一般の夢とちがつて、人間が人間の夢をみるのではなくて、そこには何ほどか「人間以上の存在」が主要な役割りを果していると云ふことである。神、仏、祖先の靈、等がいつも宗教的夢の中心となるようである。従つて、このような宗教的夢をみる人は、何ほどかの宗教的生活をいとなむ人であることが常例である。宗教的信仰と宗教的生活の中にあつてみられる夢こそ、それが宗教的夢なのである。人間以上の存在を全く認めず、宗教的信仰も生活もない人間は、宗教的夢をみることは

ないであらう。宗教的夢は、この意味に於て、深い宗教的祈りに通ずるものと云へよう。夢は一般に人間の「願望の充足である」場合が多いが、若しそうだとすれば、宗教的夢は宗教的願望の充足に関係することが多いと云へるであらう。それは人間の罪と悩みと死につながる、不安の解決と心底からの歓喜への願望なのである。

註(1) 宮城音彌「夢」五四―六〇頁

- (2) 同上 一二―三頁
- (3) 同上 二―三頁
- (4) 同上 六頁
- (5) 同上 一五頁
- (6) 同上 二八頁
- (7) 同上 三〇頁
- (8) 同上 六一頁
- (9) 同上 七八頁
- (10) 同上 八三頁
- (11) 同上 九一頁
- (12) 同上 八四頁
- (13) 同上 八四頁

- (14) 同上 八五頁
- (15) 同上 八七頁
- (16) 同上 八九頁
- (17) 同上 一一一頁
- (18) 同上 一二九頁
- (19) 同上 一二五頁
- (20) 同上 一七八頁
- (21) 同上 一八〇頁
- (22) 同上 一八〇頁
- (23) 同上 一八〇頁
- (24) 同上 一八〇頁
- (25) 同上 二一四頁
- (26) マタイ伝一章一八一―二五節
- (27) 亀井勝一郎「親鸞」(百華苑版) 八二頁
- (28) 同上 七九―八〇頁
- (29) 国訳大蔵経(昭和新纂)
- (30) 長井真琴「釈迦牟尼と其教義」三五―六頁

- (31) 同上 三六一—七頁
- (32) 同上 三七頁
- (33) R. E. Hume : *The World's Living Religions* P. 44
- (34) *ibid.*
- (35) *ibid.*
- (36) 須賀隆賢「全法然」五頁
- (37) 「御遺告」
- (38) 同上
- (39) 須藤光暉「親鸞聖人」九頁
- (40) 「親鸞」八三頁
- (41) 同上 八三—四頁
- (42) 同上 八四頁
- (43) 龍谷大学編「真宗史」九—一〇頁
- (44) 「親鸞」九三頁
- (45) 「伝絵」(第二段)
- (46) 北畠玄瀧編「本願寺」二二頁
- (47) 「親鸞」九四頁
- (48) 懸田克躬「眠りと夢」一五三頁